九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

物語化する王の死 ： スルタンIX世とヒロヒト

中島, 成久
法政大学

https://doi.org/10.15017/2244142

出版情報：九州人類学会報. 19, pp.9-22, 1991-11-20. 九州人類学研究会
バージョン：
権利関係：

物語化する王の死[1)]

― スルタンⅨ世とヒロヒト ―

中島成久

交錯する人生，交錯する問題

1988年9月19日の昭和天皇ヒロヒトの大量吐血以来，日本は「自粛」ムード一色に蔽われた。ヒロヒトは'89年1月7日に死去し，2月26日に大葬が行なわれた。そして'90年11月に新天皇・アキヒトの即位の礼，大嘗祭が行なわれたことは，周知のとおりである。私は日本の自粛ムードが高まる頃コーネル大学に留学中であったが，ヒロヒトの死に符合するように，インドネシアのスルタンⅨ世の急死が伝えられた。スルタン・ハメンクブウォノⅨ世は，1988年10月2日（インドネシア時間10月3日），健康チェックのために訪れたワシントンで，心臓麻痺のため76歳の生涯を閉じた。

この二人の人生は実に好対象をなしている。スルタンⅨ世はオランダの間接統治の下，四つに分裂したマタラム王家の一つ，ジョクジャカルタのハメンクブウォノ家の第九代目の王として，1940年に即位した。年齢的にはヒロヒトの方が11歳年長であるが，日本のインドネシア占領時代（1942年3月―45年8月），二人は支配・被支配を代表する王として対峙した。

だがスルタンは従属的地位に甘んじることなく，日本の過酷なローム者徴収を批判し，ジョクジャの税制を改革し民衆の負担を軽くした。日本敗戦直後の1945年8月17日の独立宣言に逸早く賛同し，スカルノらを感動させた。オランダがジャカルタを占拠すると，行場のなくなった共和国政府にジョクジャを提供し，1949年までのオランダとの主権回復闘争を物心共に支援した。インドネシア独立革命の英雄の一人に数えられているが，1990年7月（つまり死の2年後），永年の功績に対して「国民英雄」メダルを授けられた。

スルタンの活躍とそのカリスマ性を高く評価したスカルノは，旧マタラム王朝時代の彼の領土を「ジョクジャカルタ特別区」として残した。大統領共和制下でのスルタンは，内務大臣(1946-49)，国防大臣(1952-53) などを務めるが，国内対立対策をめぐる問題で国防大臣を辞任した。スルタンは1965年の政変を期に，再び政治の第一線に登場する。スハルトの新体制下で，破綻した経済の再建に努め，副大統領を一期務めた(1973-78)。

スルタンⅨ世のイメージは革命時代の活躍によっているが，彼の死が，あるいは彼の政治上の伝記がどのように語られているかは，現スハルト政権の思惑に大きく左右されている。スハルトは他の候補者ではなく，なぜスルタンⅨ世を自ら副大統領に指名したのか[2)]。スルタンⅨ世は懇望されながらも，二期目の副大統領職をなぜ引き受けなかったのか。あるいは取り沙汰されるスハルトとの対立とは何であったのか，などいくつかの疑問が浮かんでくる。そうした問題に全て答えることは本稿では不可能であるが，その問題はスルタンⅨ世の伝記を如何に物語るかということに関わっている。

スルタンの死から約3週間たってから私は，プリンストン大学，高等研究所でクリフォード・ギアツに会うことができた。「自粛」（死後のヒロヒトの大葬），スルタンⅨ世の国葬という国家儀礼は，C・ギアツのいう「劇場国家」を彷彿させる状況であると私には思えてならない。私の質問の一つは，上

で述べたスルタンⅨ世とヒロヒトの死に関して，ギアツのいう劇場国家の概念で二人の死を如何に捉えたらいいかということである。

この論稿はギアツへの質問の，私なりの解答ということになる。ギアツ自身は問題の所在は確認したが，それに対する答えは日本の学者の手でなされるべきだとの見解を私に示したからである。ギアツの劇場国家論は，19世紀のバリ島の事例を元にしたものであり，それが歴史的概念なのか，あるいは歴史的経緯を離れうる抽象的概念であるのか明確でない。ギアツは明確にそれが抽象的概念であると述べたが，自分自身は“grand theorist”ではないとも答えた。つまり他の地域，他の時代の分析には方法上の留意が必要とされるということである。

ギアツの「劇場国家」論の根底は，「視覚化することは見ることであり，見ることは模倣することであり，模倣することは具現することである。」[3]という言葉に要約されうる。ギアツは，分裂していく19世紀バリの社会構造を，王がさまざまな儀礼・象徴によって人々に生きるべき指針，あるべき世界モデルを提供していると考えた。

だがこのギアツの理論を現代の国民国家における問題に応用するためには，いくつかの留保が必要である。国民国家の本質とは，B・アンダーソンのいう「想像の共同体」[4]のことであり，あるいはE・ホムズボームのいう「伝統の創造」[5]の問題である。大嘗祭儀礼の殆どが明治時代に「創造」されたことを知ると[6]，ホムズボームのいうことが理解されよう。国家はその「想像された」国民に実質を与えるために，共通言語，共通価値を強制してくる。本稿で検討する国家儀礼とは，そうした観点から理解されなければならない。アンダーソンのアイデアは，出版資本主義の成立に伴う「観念の共有」現象に最大の注意を払っている。近代国家の国家儀礼もそうした観念の共有を目指して行われるものであるが，その人工性・擬制性に注目しないと，ナショナリズムの危険な側面を見落してしまう。

死のページェント

ヒロヒトの死をめぐる日本のマスコミの論調は，戦前と戦後の歴史的断絶の意識を鈍らせている。ヒロヒトは戦争の開始に抵抗し，軍部の反対を押し切って終戦を決意し，マッカーサーに全戦争責任をとると申し出て感銘を与え，戦後は日本の復興を国民とともに成し遂げたというものである。平和の愛好家，学者天皇，気さくな好々爺というイメージが最後には残った[7]。

こうしたヒロヒトのイメージは，天皇制が本質的には暴力装置であることを忘れさせる。天皇の政治責任発言の本島長崎市長が，右翼に狙撃されたのはその最も忌まわしいものである。こうした右翼の行為は象徴天皇制の定着をはかる天皇周辺からも歓迎されていないのは事実だが，日本中を有無をいわさず自粛に突入させた異常な力は，象徴天皇制の行方を暗示している。

日本の天皇報道に対する批判の方法の一つとして，海外での天皇報道を紹介するという方法がある。韓国や中国，オーストラリア，イギリスなどで特に厳しい天皇（ヒロヒト）批判がなされたことはよく知られている。そうした国々が戦前日本軍に大きな被害を受けたことを思えば，その批判の厳しさを我々は直視しなければならないことは言うまでもない。インドネシアでは「インドネシア・タイムズ」の記事を除いては，厳しい天皇批判はなかった。自粛の進行によって，集会，祭，コンサートなどの催し物が天皇への忠誠を示すために中止されたことは，日本に天皇崇拝の気運が高まるものであると危惧さ

れるとする，その記事の指摘は正しい。

だが「インドネシア・タイムズ」の論調は，インドネシアにおける天皇報道の代表ではない。天皇死去の際いくつかの批判が報じられ，大葬の礼に参加したスハルトが，帰国の途中天皇の戦争責任を国内向けに発表したりしているが厳しい天皇批判ではない[8]。スハルト政権の成立以来，日本とインドネシアは密接な経済関係で結ばれ，最近では日本のＯＤＡの最大の投資先となっている。スハルトの「開発」政策は日本の資金を除いては成立しえず，そうした意味から日本を批判しにくい側面があるのは確かである。

私がここでやろうとしていることは，インドネシアにおける天皇批判の紹介ではない。なぜインドネシアで天皇批判が十分なされないのかの分析でもない。むしろインドネシアと日本で，進行している共通の現象を指摘することである。そのことにより日本における天皇制論議にも，新たな視点を付け加えられると思う。

スルタンの突然の死はインドネシア国民，特にジョクジャカルタ市民に大きな衝撃を与えた。スルタンの訃報が届いてからは毎晩，スルタンの霊を慰めるための追悼客が王宮を訪れ，そのなかにはスマトラのアチェ出身の学生の一団もあり人目を引いた（「民衆の力」88年10月6日）。スルタンの遺体がアメリカからインドネシアに着いた10月6日から1週間，国民的服喪期間とされた。遺体がジョクジャカルタの王宮に安置された10月7日の夜には，約15万人の弔問客があり，300キロのジャスミン，100キロのバラの花が葬儀に用いられた。10月8日に行なわれた彼の国葬には，約百万人の市民が，王宮前から17キロ離れたイモギリにあるマタラム王朝の墓までの沿道を埋め尽くした（「テンポ」'88年10月15日号）。スルタンの遺体は王宮の南の広場を通り，南門を抜けてイモギリに向かった。生前スルタンは，王宮を守る南門を通り抜けることは許されていなかった。南が死と通じているからである。

ジョクジャカルタで発行されている「クダウラタン・ラヤット（民衆の力）」紙は，二週間にわたってスルタン関係の記事で埋められた。その記事の殆どは1982年発行の『民衆のための玉座』[9]のなかでの定まったスルタンⅨ世の伝記の繰り返しと，スルタンの遺体の動き，葬儀の準備，葬儀の詳細，正妻をつくらなかったスルタンⅨ世の後継問題などの記事が中心となっている。「テンポ」もスルタン関係の特集を四回組み，スルタンがインドネシアでどういうふうに評価されているか，そしてスルタンの死がどのように受けとめられ，今後の政治への影響がどうであるかが論じられている。

また私は1990年1月から2月にかけて，スルタンⅨ世のカリスマ性の源泉についてジョクジャカルタで調査をした。スルタンⅨ世の誕生日はジャワ暦の土曜・パインの日にあたり，スルタン亡き後も，土曜・パインの日（サプツ・パインガン）には多くの人々が王宮に集まり，スルタンを偲んでいる。私は'90年2月2日のサプツ・パインガンを見る機会があった。ジョクジャ近郊のみならず，チラチャップ，スマラン近郊などからも来ていたのには驚いた。時にはジャワ島だけではなく，遠くスマトラ，カリマンタンあたりから来る人々もいるとのことである。

私が話した人々は皆，心の悩みがあるとここに来て祈るという。子供の病気の時もここで祈ることもあるという。そしてこの機会に近郊の人のみならず，遠くの知人にも会えるので，それも楽しみだという。スルタンは常に我々を導いてくれた，とスルタンのカリスマとしての性格を強調するものもいた。だが大部分は伝統的なジャワの王としての属性に注目していた。

スルタンⅨ世死去後発行されたスルタンの伝記，『スリ・スルタン，ハメンクブウォノⅨ世の日常』

は，スルタンの葬儀の模様の詳細を報告したためか，発行後一週間で3,500部が売れたという人気振りだった。これはインドネシア出版事情を考慮すると，大ベストセラーといいうる。そのなかの第Ⅵ章「常に自由を求めて」のなかで，スルタンはジョクジャカルタの王宮では，ハメンクブウォノ家の王として伝統を尊び，それが近代的精神を具現した行動様式と矛盾しなかったと述べられている[10)]。

スルタンはジョクジャカルタ特別区の終身知事であったが，知事としての実際の仕事は副知事のパク・アラムに任せて，中央政府要職を務めるためジャカルタで殆どの時間を過ごした。それでもジャワの王権を支える神話・儀礼を尊重し，時々ジョクジャカルタに帰って王宮儀礼を主催し，そうしたものに安定感を覚える庶民層の心を捉えていた。

ジャワの王権とインド洋の女神（ニヤイ・ロロ・キドゥル）との神秘的関係はつとに知られているが，今回もさまざまな物語が語られた。レヴィ＝ストロースのいう出来事を構造の中に吸収していく現象がここでも認められる。ロロ・キドゥルはジャワの南のインド洋に王宮を築き，破壊と死をもたらす一方，人々にその信仰への対価として安寧と豊穣を授けるとされている。ロロ・キドゥルへの信仰はジャワの民衆の禍福を左右する女神（あるいは霊）であり，その加護を確かなものにする者としてジャワの王が存在する。スルタンⅨ世のカリスマ性の源泉は，ジャワの王権を支える民衆の信仰体系のなかにある。

私は'90年初冬の調査中，スルタンの死とロロ　キドゥルの関わりについての，いくつかのエピソードを聞くことができた。

王宮の北広場の二本のブリンギン（バンヤン樹）のうちの一本が無くなっている。ブリンギンはインドネシアのコズモロジーにおいて，天と地を結ぶ木であり，後述するようにそれは王のコズモロジーと一致する。不思議に思って尋ねてみたら，大風で倒れたという。その光景を見ていた人の話しでは，倒れたその木だけが激しい風の直撃を受けたが，周囲の家々には何の風も吹かず被害がでなかった。そしてその事件の二ケ月後にスルタンⅨ世が亡くなった。それはあたかもスルタンⅨ世の死を予言するかのようであった。大風はロロ・キドゥルのもたらす破壊の一つだが，あるいはその破壊からスルタンが身をもって民衆を守ってくれたのか。倒れたブリンギンの枝の一部がさし木され，既に若木となって，木の生命の連続性は保たれている。

スルタンⅨ世の後継は大方の予想どうり第二夫人の長男のマンクブミに決定した。スルタンが5人の妻と22人の子供を持ちながら，最期まで正妻を決めなかったことは未だに謎である。またスルタンは王位継承権を示す短剣のジョコピトゥルンの継承さえ明確にはしなかった。そのためスルタンの死後100日目の王宮会議の席で，長老のプルボヨ氏の裁定で後継が決定された。1988年3月7－8日に戴冠式が行なわれたが，新スルタンを乗せた馬車が王宮の広場にさしかかった時，先導していた馬が突然いななき，乗っていたマンクブミの腹違いの弟のプラブクスモが落馬した。その瞬間に，新スルタンの馬車にさっとすべりこむ一人の女性の姿（ロロ・キドゥル）を見た，と主張する人もいた。落馬したプラブクスモは怪我一つせず，あたかも誰かに抱きかかえられるような感じであった，と語っている[11)]。

対立を止揚するものとしての王，その現代的再生

スルタンⅨ世は1912年4月12日，スルタン・ハメンクブウォノⅧ世の正妻の長男としてジョクジャに生まれた。幼名をドロジャトゥンという。4歳で王宮からオランダ人の家庭に移され，オランダ語に

よる初等，中等教育を受け，後にライデン大学に学び，ジャワ研究の硯学，スフリーケの下で国家学を専攻する。ドロジャトゥンは博士号を目前にした1939年9月，父スルタンⅧ世の命で急遽帰国した。第二次世界大戦の暗雲がヨーロッパに垂れ込め始めたからである。スルタンⅧ世は息子をバタヴィア（ジャカルタ）まで出迎え，王位の象徴である短剣を贈った。スルタンⅧ世はジョクジャに向かう汽車のなかで突然倒れ，2日後ジョクジャの病院で亡くなった。王宮会議の結果，王位継承を示すジョコ・ピトゥルンが既にドロジャトゥンに手渡されていたことを最大の理由として，ドロジャトゥンが第9代目のスルタンに選出された。年齢的には41人の異母きょうだい中16番目である（「民衆の力」'88年10月10日）。

ジャワの王はジャワのコズモロジーの中心に位置する。ジャワの王は，神々の住む天界と，生産と同時に破壊をもたらす地界の中間に立つ。こうした王の役割はその名前によく投影されている。スルタンⅨ世のハメンク・ブウォノ家は「宇宙の中心」という意味であるし，スラカルタのマタラム王朝直系のパク・ブウォノ家は「宇宙の爪」という意味である。スルタンⅨ世の正式名は，Sampeyan Dalem Ingkang Sunuhun Kanjeng Sultan Hamengkubuwana Senopati Ingalaga Ngabdurrachman Sayidin Panatagama Kaping Sanga という長いものである。そこには「王」(Sampeyan Dalem)，「戦争の指導者」(Sultan)，それに「宗教指導者」(Panatagama) という3つの異なった称号が並んでいる。こうした称号はジャワのたどった歴史的変遷を示すが，王はインド王権思想の影響を受けてヴィシュヌ神の化身と信じられた。

そして真の王には「神秘力」（クサクテン），「叡知」（クビジャクサナアン），「天啓」（ワッユ）が溢れており，「私心のない」（タンパ・パムリー）人物と考えられた。逆に言えばもしある王にこうした資質が無くなったと考えられたら，そうした王・体制は倒されるべきだという抵抗の思想を準備する思想でもある[12]。

ただこうした王の宇宙論的位置付けは，オランダの武力の前には何の意味もなかった。1600年に成立したオランダ東インド会社は，マタラム家の内紛に乗じて勢力を延ばし，ジャワの王家にはただ間接統治の手段としての権威しか残されていなかった。そして19世紀になると植民地収奪が強化され，スルタンⅨ世の生まれた20世紀初頭にやっと，インドネシアという意識が芽生え，「ブディ・ウトモ」などの来るべき独立のための運動が始まった。

ドロジャトゥンはスポーツを愛し，車の運転を早くから楽しんでいたことから分かるように，オランダの近代教育を受けた合理主義者であることは確かである。そうした合理主義者としてのスルタンは，徹底した改革者として，日本統治時代から，独立革命，新国家建設時代へと活躍していく。

日本統治時代スルタンは，基本的には日本軍に協力する。だが盲従では決してなく，ロームシャ提供などでは相当の抵抗をしている。また日本軍を利用して，ジョクジャカルタ地域の灌漑水路の整備を行った。この用水路は「マタラム用水路」と呼ばれているが，日本語では「軍政発水路」または「軍政用水路」と呼ばれた[13]。

インドネシア独立革命をその目でつぶさに観察する機会を持ったG・ケイヒンは，スルタンのことを次のように述べている[14]。「スルタンⅨ世は独立間もない共和国政府の強烈な支持者であるだけではなく，その中核の一人であった。更にスルタンはジョクジャを実験地とし，のちに共和国全体に広まって行く社会改革の推進者でもあった。その改革の主なものとして，(1)オランダ時代特定の地主にのみ与

えられていた村役人の選挙権を，18歳以上のすべての村人に解放したこと。(2)村の政治と行政機関を分離したこと。(3)他の村との連合を作り，教育，灌漑などの広域行政を容易にしたこと。(4)豊かな村人の収入に10%の税金をかけ，それを貧しい村人の救済と自助の基金としたこと。」

だがスルタンの一生の特徴を，合理主義者としてのみ捉えるのは正しくはない。それは対立するものを止揚するという，ジャワの伝統的王の役割の近代的再生という理解の仕方が実像に近いと思われる。それはオランダ支配，日本統治，独立革命，9・30事件という激動のインドネシア近・現代史を生き抜いてきた，スルタンⅨ世の人生に課せられた試練を乗り越える彼なりの術であった。

スルタンⅨ世の強烈な個性が発揮されたのは，戴冠を許可するためにオランダ東インド総督アダムスが突きつけた条件を，新スルタンがなかなか承諾しなかったことである。アダムスの条件とは，あるパティー（長官）の二重帰属（オランダとスルタン側）の承認，顧問官の言論の制限，王宮軍の指揮をオランダ軍が持つことの3つである。総督アダムスとの話し合いは1939年11月から，'40年2月まで続けられた。

新スルタンがアダムスの要求を受け入れるきっかけとなったのは，2月のとある夕刻，夢現の状態でまどろんでいた時，彼は次のようなジャワ語による祖先の呼びかけを聞いたという。"Tole, tekena wae, Landa bakal lunga saka bumi kene".（ドロジャトゥン！　ただ署名するだけのことです，オランダはすぐにこの地を出て行きます。）'Tole'とは両親から男の子供に対する呼びかけの言葉だが，この場合彼の亡くなった親なのか，あるいは遠い祖先なのかははっきりしない。こうした神秘主義の強烈な体験は，スルタンⅨ世の人となりを考える場合重要である[14]。ベン・アンダーソンがいうように，瞑想をし，感覚を研ぎ澄まし，ひたすら内面にエネルギーを向けることで，宇宙を統べる原理を体得できるとされ，そうした神秘主義的体験の体得で得られるパワーが，ジャワの王権の根底をなしている。

そしてスルタンのカリスマとしての名声は，1949年3月1日の共和国軍によるジョクジャカルタ攻撃で最高頂に達する。1948年12月19日のオランダの第二次警察行動で，ジョクジャカルタは占拠され，スカルノ，ハッタらの指導者が逮捕された。民衆の共和国軍への信頼は落ち，国際的にも共和国の存在そのものが窮地に陥った時期であった。オランダはスルタンを翻意させようとして，全ジャワの王としての地位を与えようとしたが，共和国を支持するスルタンの意思を変えることはできなかった。またこの時スルタンは王宮の財宝を，税制の逼迫した共和国のために用いている。

スルタンはこの時代のことを次のように回想している[15]。「その後わが軍のゲリラ活動が続き，人々に影響を与えていた。だが1月の終りには人々の士気は非常に低かった。そうした時私はオーストラリアからの，ＢＢＣ，ＶＯＡ放送を聞き，3月の初めに国連の安全保障委員会でインドネシア問題が討議されることを知った。私はこのニュースに釘づけになった。そして低下した人々の士気を回復させ，共和国の存在を示す良い機会になると思えた。そのため私は2月初旬スディルマン将軍に手紙をだし，ある軍事行動の許可を要請した。スディルマン将軍はこれを許可し，スハルト中尉（現大統領）指揮する一個師団と直接連絡するよう，私に指示してきた。我々は2月14日に会った。3月1日朝6時，サイレンが聞こえたら攻撃開始であった。我々はヨクヤカルタを3時まで占拠した。午後2時にオランダの戦車部隊がヨクヤに向かっているという報告を得た。このため犠牲者が多くなるのは良くないこと，国連安全保障委員会の注目を引くためには既に十分であることを理由に，午後3時に引き上げるよう，私はスハルトに提案した。この軍事行動は国連に伝えられ，そして安全保障委員会からインドネシア共

和国の回復が決定される，という大きな影響を与えることに成功した。」

1950年代と'70年代の在インドネシアオーストラリア大使のクリッチレイは，スルタンのこの時代の活躍を外交官として次のように評価している[16]。「国連は1949年6月22日に停戦と，オランダ軍の撤退を要求した。ジョクジャカルタ地区からのオランダの撤兵の直前に，オランダ側と接触や敵対行動を避けるために，スルタンは共和国軍全軍に特別命令を発した。共和国軍の指揮が高かったので，命令はなかなか実行されてこなかった。軍隊はオランダ側が国際世論を動かすのにどれだけ長けているかを知らなかった。とにかく軍の指導者たちは，ゲリラ闘争は成功しており，それを継続したかった。彼等は外交交渉に深い疑いを持っており，武力に頼ることを望んだ。だが外交に携わるものの側から見ると，勝利している時外交交渉をやめ武装闘争に集中することは，インドネシア人民に不必要で長期の苦しみを与えるということを確信している。」

独立革命当時スルタンの秘書を務めていたスロスマルジャン（現インドネシア大学教授）は，スルタンⅨ世をオランダへの戦いと民衆への指導性において「現代の偉大なスルタン」と呼び[17]，スルタン，スハルトとともに「新体制」時代を支えたアダム・マリク（元副大統領）は，'Sabda Pandita Ratu'（名賢王）と呼んでいる[18]。 スルタンⅨ世は，オランダ支配に最初に抵抗したディポネゴロに因んで，「デイポネゴロ二世」と呼ばれてもいる（「ヤヤサン・イダユ・ジャカルタ」'88年10月5日）。

オランダ支配，日本統治，それに独立革命時代に示されたスルタンⅨ世の強烈な個性は，近代精神とジャワの神秘主義・王権思想との共存である。それを結びつけるものは不屈の抵抗精神であり，スルタンはそれを彼が受けた二つの，原理の異なる教育・思想から自分のものとしたと考えられる。近代の人間平等主義・民主主義と，ジャワの理想王という思想である。スルタンⅨ世という人間を考える場合，こうした折衷主義という傾向を容易に指摘できる。こうした傾向はスカルノにもはっきりとみてとれる。スカルノの創造したインドネシア建国の理念であるパンチャシラの五原則は，ジャワのコズモロジー，仏教，イスラム，近代民主主義といった相異なる原理が併存している（スカルノの言葉では，「異なるものが溶解され一つのものに焼き直された」ものとなる。）

調停者，あるいはインドネシア統合での役割

こうした傾向はジャワ人の間では決してマイナスの評価を受けない。インドネシアの政治家のなかで，スルタンⅨ世ほど全国民的人気のある人物はいない。それはスルタンが政治の第一線に決して出ようとはせず，まさしく「私心を捨て」自らを調停者的位置に常に置こうとしてきたことによる。また多くのことを知りながらも積極的にそれを語る，あるいは神話化された自伝をつくろうとしなかったその公平で，禁欲的な性格にもよる。この点で1957年の「指導された民主主義」導入後，独裁的地位を手に入れ，軍，宗教界それに共産党という，3つの原理の異なる組織の際どいバランスの上で政治を指導してきたスカルノと異なる。スカルノはスルタンⅨ世のカリスマ性を高く評価しており，スルタンと全面的な対立になることをスカルノの宗教的指導者は戒めていた。

スルタンとの親交が長く，現在スハルトの顧問の一人のルスランは，スルタンとスカルノとの関係を次のように述べている（「ザ・ジャカルタ・ポスト」'88年10月5日）。「スルタン・ハメンクブウォノとスカルノはお互いに尊敬しあっていたが，両者は1950年代と'60年代初期の政策では一致しなか

った。1950年代にスルタンに一つの試練があった。国防大臣として彼は，分離主義とモスレムの反乱に対して，共和国防衛の行動をとらざるを得なかった。1952年彼は議会を解散すべきだという軍部の意見をスカルノに飲ませた。議会が防衛問題に干渉していると軍は怒ったわけである。だがスルタンは同時に軍内部の対立に直面し，毅然として辞任した。スルタンには政治的野心のないことをこの時に証明した。国家のこの危機を回避するために，スカルノ，ウィロポ（当時の首相），それにスルタンの果たした役割は大きかった。」

「全ての危機を克服した指導者」と題する「コンパス」紙の論文（'88年10月9日）は，調停者としてのスルタンの役割をよく示している。独立革命時代のインドネシア政治は，オランダとの徹底的な武力闘争を唱える軍と，外交交渉で独立を達成しようとする政治家との間で激しく対立する。スルタンⅨ世は，軍人とエリート政治家の間に立ち，対立が決定的な亀裂に至るのを防いだと評価されている。スルタンⅨ世と軍との繋がりは独立宣言直後に遡る。彼は1945年11月12日に国防大臣に選出されたが，時のシャフリル内閣に承認されなかった。スルタンⅨ世は軍人以外から選ばれた唯一の国防大臣で，それはスルタンが特に軍との親密な人間関係を持っていたことを示す。

スルタンⅨ世は政治的発言ではきわめて慎重で，1948年のインドネシア共産党のマディウン蜂起に対しては，彼等は共和国を解体に向けようと怒ったものの，1965年の政変で何も発言していない[19]。スルタンの共産主義観は詳らかではないが，「民衆の力」紙は次のように賞賛する（'88年10月4日）。「スルタンは人民主義と反共産主義を目指す革命が生みだした共和国の中で，重要な戦いをした王であった。私心のない政治家，模範的な愛国主義者，変化にすぐ対応できる王，真の民族主義者」と。

あまり伝記のなかでは強調されないが，スルタンは卓抜した企業家でもあり，自分の一族を率いてホテル経営，貿易などの事業を行なっている。スルタンはインドネシアでも50番以内，少なくとも100番内には入る資産家であるといわれている。スルタンⅨ世が，自由主義体制を支持する民主主義者であるとはいいうる。だが反共主義者であるとは言えないだろう。インドネシアの独立革命が，最初から反共主義を目指していたのではない。それはスハルト政権が誕生してからのことである。こうしたところにもスルタンの死が，現スハルト政権にどのようにディスコースされているかを知ることができる。

スルタンのこうした調停者的役割は，多数の民族集団を抱えるインドネシアの統合の問題で遺憾なく発揮されている。スルタンⅨ世のインドネシア統合における民族集団をまとめ上げていく役割を，フロレス島出身の秀才，イグナス・クレーデンは次のように述べている。「この国の民族的異質性からして民族集団問題は，国家建設の過程で特別の注意を払われるべきものである。こうした条件のなかで，リーダーシップは特に重要である。国家統合は，多様な民族集団に受け入れられるリーダーがいるかどうかに，部分的にはかかっている。こうした点からしてスルタンは非ジャワ系インドネシア人に受け入れられ，そして人気を博した数少ない政治家である。彼はスマトラや他の外領の人々と永い友情関係にあり，極めて良い印象を残した。」[20]

更にクレーデンは，スルタンとバンカ島出身のノルマとの結婚も，インドネシアの民族集団の統合には意味があると強調している。スルタンの先の4人の妻（一人は既に死亡）はすべてジャワ人であるが，ジャワの王家がジャワ人以外と結婚するのは極めて異例というわけだ。ノルマは魅力的な女性で，スカルノにも可愛がられていた（性的ではない。なお前夫とは死別）。スルタンの最期を見取ったのはノルマで，晩年のスルタンに最も愛された女性である。ノルマとの間には子供はないが，スルタンはノルマ

のためにボゴールに部屋数26以上の大邸宅を建てたほどである。そしてノルマとその子供のために，ビデオの政策・販売会社を作ってあげた。ノルマの存在は王宮の内部で激しい嫉妬の対象となったが，スルタンの腹違いの弟のプゲル氏はそれを，複数の妻たちによくあることと話していた。だが実際は，財産問題が絡んでいたことは確かである。

民族集団統合の問題で，バンカ島出身のノルマとの結婚よりも，スルタンが自分の子供の結婚に際して，自由恋愛を認めたことを，私は高く評価する。相手の地位，民族集団が何であれ，もし好きであれば何の障害にもならないということである。スルタンの第一夫人の長男のハディクスモは，スマランのあるルラー（村長）の子供と結婚している。彼女は，ガジャマダ大学の心理学部卒で，昔は評判の美人だった。第三夫人の長男のプラブクスモは，スンダ出身の女性と結婚している。スルタンはこうした子供の結婚に際して，ジャワの父親の常として息子嫁の実家を訪ね，結婚の挨拶をしている[21]。

なおスルタンの調停者的役割は，スハルト体制下での「開発」政策でも明瞭に見て取れる。スルタンは経済閣僚としてその政策を推進するが，実際のプランニングは「開発マフィア」と呼ばれた，インドネシア大学経済学部のメンバーが担った。私は経済エキスパートとしてのスルタンの能力を大して評価していなかったので，弟のプゲル氏に「開発」政策におけるスルタンの役割を質問してみた。すると彼はスルタンは多様な人材を集め，それをまとめあげていく上で功績があったと語ってくれた。

虚像としての民衆

スルタンⅨ世の死を報じるインドネシアのジャーナリズムの表現は，いくつかの特徴を備えている。そのなかで最も頻繁に出てくる言葉は，「民衆」，「民主主義者」，それに「真の王」という言葉群である。その文字あるいはそれと関連する言葉は，スルタンの死を報じるインドネシアの新聞の活字のなかに踊っている。

いくつかの見出しから例を拾ってみよう。「民衆に愛された王」『コンパス』（'88年10月4日），「幼少より民衆の真ん中にいた」『民衆の力』（10月4日），「スリ・スルタン，偉大な政治家，飾りけのない民主主義者」『ビジネス・インドネシア』（10月4日），「スリ・スルタン，完全なるジャワの王」『スアラ・カルヤ』（10月7日），「すべては民衆のおもむくままに」『テンポ』（10月8日，32号），「民衆に人気・人望のある王」『パンジ・マシャラカット』（10月11日），「“偉大な”人間からの教訓」『テルビット』（10月11日），「最も愛されたスルタン」『ジャカルタ・ジャカルタ』（10月16日，119号）などなど枚挙に暇がない。こうした表現群のイメージこそは，スルタン・ハメンクブウォノⅨ世の死を演出する物語であるのだ。

私はスルタンⅨ世の人生で，オランダ留学時代は非常に重要だと思っている。だが，『民衆のための玉座』第3章の「学校時代」の最後で，スルタンと編集者との次のような応答には落胆させられる。

問：オランダ時代どのような本を読みましたか。

答：国家学関連の本はたくさん読んだが，その名前まではよく覚えていない。雑誌とか新聞だったら，「ライデン新聞」(De Leidse Courant)の愛読者だった。

問：ジャワ語をなぜ忘れなかったのですか。

答：ジャワ語で話す機会はなかったが，ジャワ語の理論（文法？）の授業があったのでそれを受けてい

た。でも教えていたのはオランダ人の先生だった。

問：スルタンのような学生はオランダ人の助言者がいましたか，それともスルタンの動きはすべてオランダによって監督されていましたか。

答：少しは監督されていたでしょう。一度「オランダ社会主義運動会」の会議に参加したら，後で植民大臣に呼び出された。そこで私は何のことかただ知りたいだけだったと答えた。

問：後に民族主義者として名声を得るインドネシア人留学生らと親交がありました。

答：全くありませんでした。多分私はオランダ人とよくつきあったからでしょう。

問：インドネシアは植民地にされたままで，スルタンは，西欧教育体制はもう終わると思いましたか，それとも子孫にまで続くものと思いましたか。

答：私はオランダ教育を受けてオランダ人の心を知ることができた。これは誰にとっても，もしオランダ人と関係をもつ者にとっては，役にたつものであるという気がしました。

こうした反応からは，後の革命時代のスルタン像を示すものは殆ど伺えない。オランダ人社会のなかにうまく溶け込み，また社会主義思想の影響を受けないよう監督されていたことがわかるだけである。

ただスルタンみたいな人間は状況に対応することが極めてうまいタイプであるから，オランダから急遽帰国してからすぐに王位を継承するという短期間のうちに，彼は自分に何が課せられているかを見抜いたのであろう。相手の力が圧倒的に大きい時は，その力をうまく利用してその長所を学び，後々の仕事に見事に生かしている。そして独立革命時代は今度は断固共和国支持を貫き，意思の強さを見せつける。更に政治的野心なしに国家の統一を求めるという，禁欲的な政治生活をその後続けた。

インドネシアの人々がスルタンのことを，「真の王」，「愛国者」，「民主主義者」というのはこうしたスルタンの経歴に対してであるが，そこに必ず「民衆」という言葉が付け加わるのは，ジャワの王権思想の投影である。古来クリスはジャワ人の人格を表わすものとしてみなされてきたが，王と民衆の隠喩としても用いられてきた。クリスが剣と鞘の部分からなって初めて一つの全体をなすように，王国も王と民衆がいて初めて完成する。支配者（グスティ）と非支配者（カウロ）はその役割が異なるだけで，対等であるとされてきた。こうした関係は，ワヤンのなかのサトリオ（主にパンダワ側）とプノカワン（道化）との関係において典型的に現われている。

スルタンⅨ世を知る人々は口々に，スルタンのことを「質素」，「飾り気のない」と形容している。スルタン自身も普通の人間であるということをそのパフォーマンスで表わしていた。例えば，スルタンが料理が好きなことはよく知られている。しばしば家族のために，あるいは王宮の官吏を交えて手料理をふるまった。スルタンは務めてインドネシア語を話し，ジャワ語に示された身分制を意識させないようにしてきた。だがそうしたいわば「普通の人間」としてのスルタンの行動様式が強調されればされるほど，それは王と民衆の相即不離を説く，ジャワの王権思想の理想の姿であると評価されるのは皮肉なのだろうか。

インドネシア独立革命がもたらした民衆論には二つの系譜がある[22)]。 一つはスカルノの「マルハエニズム」である。オンホッカムは次のように述べている。「マルハエニズム」は1930年代のスカルノが，逮捕，獄中，出獄の繰り返しのなかで得た民衆論である。マルハエンという小農に代表されるのは，実は「小企業家」のことであり，エリートではないし，プロレタリアートですらない。スカルノはその激烈な言葉にも関わらず，社会の内部の諸関係を問題にしていない。ために革命の指導者の間で革命の

性格とその展望に，大きな意見の対立を生み出した。スカルノの役割はそのカリスマ性により，人民大衆支配の正当性を与えた。この革命についてのスカルノの象徴性によって，インドネシアの全ての社会層，それに国際社会にインドネシア革命の実在性を印象づけた。

インドネシア革命に関わるもう一つの民衆論は，共産主義である。イスラムは宗教的達人とそうでない者とを峻別するが，信仰共同体のなかでは基本的には対等であるとされる。だからイスラムには「民衆」論は，基本的には存在しない。独立前コミンテルンに指導された共産主義者は，植民地からの真の解放を目指すには，反体制イスラム勢力との共闘を求めるよりも，共産革命を目指すようになった。彼等の活動は勿論非合法的なものとされ，タン・マラカの国際的活躍はよく知られている。独立後はインドネシアそのものが，反帝国主義・反植民地主義を掲げる非同盟諸国のリーダー核となり，インドネシア共産党は大きく勢力を伸ばした。'60 年代に入ると国内では反米感情が高まり，農村では土地所有をめぐる問題などで対立が先鋭化した。マルクス主義による体制批判は，イスラム知識人の体制批判と相通じるところは勿論ある。だが宗教的権威を否定して「人民」という新たな権威への従属を迫ったり，親中国政策が国内の反中国人感情を惹起するのに気付かなかったり，あるいは共産主義の原理が個別の民族集団の利益に優先するといったその独善的な態度は，結局1965年の大混乱へと繋がっていった。

'65年9月30日の共産党クーデ未遂事件を契機として，インドネシア共産党は懐滅した。その後のインドネシアは外国投資を導入し，経済テクノクラート主導の開発政策をとり続けてきた。だが軍事力で国内対立を押さえつける姿勢はスカルノ政権以上で，ゴルカール（職能組合）という翼賛政党指導の開発優先は，多数の民族集団におけるジャワ人優位を更に進めている。

開発政策は都市部におけるスラム層の，無慈悲な切り捨てとしても現われてきた。ジャカルタ市では数年前から主要道路へのベチャ（人力者）乗り入れが禁止されてきた。ベチャが近代交通手段発展の邪魔になり，また危険でもあるという理由からだ。ところがジャカルタ市長は突然 '89年末をもって，ジャカルタ全市からベチャを追い出そうと決意した。1990年1月には，市長命令を無視して営業していたベチャが警察に押収され，見せしめのために何万台というベチャがジャカルタ沖の海中に投棄された。この強引な政策はさすがに大きな批判を受け撤回されたが，同じ市長はスラム街の再開発にも熱心で，わずかな立ち退き料とひきかえに大量の人々をジャカルタ市から追い出している。開発の農村浸透のため都市へ流れ込んできた人々を，都市の美観・経済性のためにこうして切り捨てるやり方は，「民衆」苛めと呼ばれても仕方がないだろう（「テンポ」'89年2月3日号）。

スルタンⅨ世を称えるためにあれ程登場した「民衆」とは，いったい何であろうか。現在のインドネシア政府は，共産主義者とイスラム急進主義者を，危険人物とみなして，徹底的に弾圧している。彼等が賞賛されるべき「民衆」でないことは確かであるが，社会の貧困層ももし民衆でないとしたならば，残るのは何もない。あるいはそれは現政権に従順な人々の別の呼称であるかもしれない。スルタンⅨ世の人生が，今日のインドネシアを作り上げる上でカリスマ的な役割をはたしたことは否定できないが，その死を賛える声に響きのいい「民衆」という言葉は，結局現実の矛盾を隠蔽する役割しか果たしていないのではないか。

終りに ー 開かれたナショナリズムへ

日本では敗戦後ナショナリズムを語ることが困難になっている。ナショナリズムを語ることはファナティックな右翼と即みなされ，日本の国家的基盤についての一致は得られていない。だが中曽根内閣の登場以来唱えられてきた「国際国家論」構想は，国際化をはかるために日本の伝統を強調するというものであり，日本のなかの差異性には目を閉ざす傾向が強まっている。だから君が代，日の丸，皇室行事の国家行事化が強行されているのである。「国際国家論」構想は形を変えた，しかも戦前を反省していないナショナリズムであり，最近流行の「ナショナル・アイデンティティー」論も，同様の道を歩む危険性がある。

スルタンⅨ世の死の物語を作り上げるインドネシアと，ヒロヒトの死の物語を作る日本とは，その国家形成の歴史は大きく異なるものの，一方は「開発」政策を軍事力で押し進め，他方は「国際国家論」で装っても，ともに旧来の国家ナショナリズムの再来を目指して進んでいると捉えることができそうだ。

私はスルタンⅨ世の死のディスコースが，かなり恣意的になされていることに注意を喚起してきた。「民衆の力」紙が強調する，反共主義を目指してきたインドネシア独立革命を支える「愛国主義者」，「民族主義者」としてのスルタン像は，矛盾に満ちたインドネシアを武力で統合する姿勢を肯定するだけで，その多様性を民主主義の徹底という方向で認めていくものではない。

翻ってヒロヒトの死のディスコースを考えると，インドネシアと共通の傾向を指摘することができそうだ。インドネシア人と話すと，日本とインドネシアの最大の違いが，その国家的一体性の有無である。日本が単一民族国家であることは神話にすぎないが，「国際国家」を目指す現在の日本の国家としてのアイデンティティーの確認のために，再び天皇制が前面に出てきつつある。ヒロヒトがカリスマであることはなかったが，平和主義者としてのイメージの完成は，「国際国家」日本の行方の多難さを象徴している。もし我々が真に歴史の教訓に学ぶのならば，二人の神聖王の同時期の死に，単なる偶然以上の問題を見出すことができるはずだ。

註

1) 本稿は1989年度法政大学学内助成金研究「死のメディア・ポリティックス ── スルタンⅨ世の死のディスコース ── 」の研究成果である。また1986年度文部省科学研究費補助金奨励研究「スカルノにおける政治的ディスコース」の研究成果の一部でもある。

2) この問題についてハーバート・フィースは，次のように述べている。1966年3月，スカルノから政治の全権の移譲を受けたスハルトは，翌 '67年3月正式に大統領に就任する。だが副大統領を誰にするか決まらなかった。ハッタ，アダム・マリク，スルタンⅨ世，それに何人かのイスラム指導者の名前が上げられた。だがスハルトは「暫定人民会議」に諮ることなく，経済，財政，産業大臣のスルタンⅨ世（当時）を本人が日本とカンボジア訪問中に，「大統領職代理」に決めてしまった。（スルタンが正式に副大統領に選ばれるのは1972年のことである。） Harbet Feith, 'Suharto's search for political Format' in *INDONESIA*, 1968, No.6 (October), pp100-1.

3) C. Geertz, "Negara", 1980, p130.

4) Bennedict Anderson, "Imagined Communities", 1983. 邦訳，『想像の共同体』，リブロポー

ト。

5) E. Hobsbawm, "Introduction: Inventing Tradition' in "The Invention of Tradition", Cambridge University Press, 1983, pp1-14.

6) 例えば村上重良,『天皇の祭祀』, 岩波書店, 1977参照。

7)『検証・天皇報道』法学セミナー増刊44, 日本評論社, 1989。『昭和の終焉』, 岩波新書, 1990。

8)『海外紙誌に見る天皇報道』アジア民衆法廷準備会編, 凱風社, 1989, 14-5頁。『検証・天皇報道』38-9頁。

9) "Tahta Untuk Rakyat, Celah-celah Kehidupan Sultan Hamengkubuwono IX" disunting oleh Atmakusumah, Penerbit PT Gramedia Jakarta.

10) "Sri Sultan; Hari-hari Hamengku Buwono IX", Sebuah Presentasi Majalah TEMPO, Penerbit PT Pustaka Utama Grafiti, p68.

11) 尤, プラブクスモが落馬したのは, 身に付けていたクリスとの相性が悪かったからであるという。このエピソードは在ジャカルタ日本大使館文化局に長く滞在されていた, 染谷臣道先生に伺ったものである。

12) B. Anderson, 'The Idea of Power in Javanese Society' in "Cultures and Politics in Indonesia" ed. by C. Holt, Cornell University Press, 1972.
Soemarsid Moertono, "State and Statecraft in Old Java", Cornell University Press, 1968.
土屋健治,『インドネシア政治思想史研究』, 1982参照のこと。

13) "Tahta Untuk Rakyat", pp59-61.

14) George Kahin: 'The Sultan and The Dutch', "Tahta Untuk Rakyat", p. 176.

15) 'Republik Di Bawah Kepungan-Sri Sultan Hamengku Buwnono IX-', in "Gelora Api Revolusi, Sebuah Antologi Sejarah" diusung oleh Colin Wild dan Peter Carey. Diterbitkan atas kerja sama BBC seksi Indonesia dan Penerbit PT Gramedia Jakarta, 1986, pp.187-92.

16) Tahta Untuk Rakyat, pp. 164-5.

17) Selo Soemardjan, 'In Memoriam: Hamengkubuwono IX, Sultan of Yogyakarta, 1912-1988', *INDONESIA*, No. 48, 1989.

18) Tahta Untuk Rakyat, p. 10.

19) ベン・アンダーソン教授が私に語った発言。なお1948年のマディウン事件についてのスルタンの発言は, "Tahta Untuk Rakyat", p. 162。

20) Ignus Kleden, 'The Changing Political Leadership of Java: the Significance of Sultan Hamengku Buwono IX', *PRISMA*, 46, pp. 28-9.

21) ただハディクスモの女性関係のため, 彼等の結婚はうまくいっていない。彼女は離婚を望んでいるが, 王宮の伝統の中では離婚は許されていない。彼等の結婚は恋愛の結果であるのだが, 彼女のほうもスルタン家とのつながり, 名誉, お金などの打算で結婚したことは否定できず, その点で批判されている。

22) オンホッカム,「一人立っていた英雄」『真実のインドネシア』, サイマル出版会, 1979, 21

-31頁。アルフィアン，「天翔ける革命の思想」前掲書，125-61頁。